

2016年度の事業は次の団体の助成により実施しました。(五十音順)

独立行政法人 国際交流基金アジアセンター  
独立行政法人 国立青少年教育振興機構子どもゆめ基金  
公益財団法人 ベネッセこども基金  
公益財団法人 前川報恩会  
一般財団法人 YS 市庭コミュニティー財団

後援：東松島市教育委員会



# 被災地から未来への対話

インドネシア・アチェと  
宮城県東松島市の子ども国際交流 2016  
報告書

特定非営利活動法人 地球対話ラボ

2017年3月発行  
特定非営利活動法人 地球対話ラボ  
東京都大田区山王 3-12-5  
070-5015-7180  
chikyutaiwa@gmail.com  
<http://www.taiwa.or.jp/>

デザイン：まちとアート研究所  
イラスト：門脇篤

# 報告にあたって



ウレレ海岸、アチェ



室浜、東松島市宮戸島



地球対話ラボは、地球上で遠く離れた場所にいる人と人が、インターネットテレビ電話などを使い、対面・双方向・ライブでコミュニケーションを行う「地球対話」の活動に取り組んでいます。

当団体の地元、東京都大田区が、宮城県東松島市と災害時の相互応援協定を結んでいる縁で、2012年に宮戸小学校と出会いました。宮戸小学校は、東日本大震災で津波に襲われ被害が甚大だった宮戸島で、避難所として島民のほとんどが共に生活した場所でした。2012年度の終わりにブータンの小学校との対話の実現し、2013年度にインドネシア・アチェの子どもたちとの交流が始まりました。

アチェは2004年12月26日のスマトラ島沖地震による津波被災地です。被災から約10年後のアチェに生きる子どもや若者の姿は、東松島市の子どもたちの未来に重なります。一方、アチェでは、震災後に生まれた世代に被災経験をどう伝え、防災意識をどう高めていくかが課題となっていました。ふたつの津波被災地の交流がお互いの力になるのではないかと考え、インターネットテレビ電話による対話を柱に、映像制作や美術ワークショップなど、様々な取り組みを行ってきました。

宮戸小学校と野蒜小学校が統合され、2016年4月に「宮野森小学校」が誕生。子どもたちの国際交流活動も、学校の特色として引き継がれています。2016年度は、アチェとの4年目の交流プロジェクトを、宮野森小学校の初めての取り組みとして実施しました。アチェと日本で活動を支え、盛り上げ、楽しみ、見守ってくださった多くのおみなさん、団体に感謝申し上げます。

2017年3月 特定非営利活動法人地球対話ラボ 理事長 小川直美

※報告書の作成にあたって私たちは、アチェがどんなところか、どんな人や団体が関わっているのかということや、宮戸小学校から宮野森小学校へと続く国際交流の経緯がわかり、現場の先生方をはじめ関わる人たちの想いが伝わるものにしたと考えました。そこで、対話交流の報告を宮野森小学校の先生方に、アートプロジェクトの報告はアーティストの門脇篤さんに書いていただきました。また、活動の中で出会ったさまざまな声をトピックとして随所に掲載しました。

## 2016年度の主な活動(報告掲載ページ)

- アチェでの被災地フィールドワーク (p04-05)
- 宮戸島地域での活動 (p06-07)
- 宮野森小学校6年生とアチェの若者たちとの交流ワークショップ (p09)
- 宮野森小学校とアチェ 子ども同士の対話・交流 (p10-13)
- 東北での被災地フィールドワーク (p17)
- 壁画の架け橋プロジェクト (p18-19)
- アチェの震災遺構でのアートプロジェクト (p20-21)

## インドネシア共和国

東南アジアの南部に位置し、東西5,000km以上の領域にわたり、赤道をまたいで13,000以上の島々からなる国。総面積は約189万平方km(日本の約5倍)、人口は2億5,500万人(2015年インドネシア政府統計)。約300の民族が暮らす多民族国家で、国民のおよそ9割がイスラム教徒です。

首都：ジャカルタ 通貨：ルピア

言語：公用語はインドネシア語だが各地で583種の言語が使われている。

日本との時差：西部(2時間遅れ)・中部(1時間遅れ)・東部(時差なし)

季節：乾季(4月～9月)と雨季(10月～3月)

## アチェ

インドネシアの西端にあるスマトラ島の北部の州。州都バンダアチェ市はインド洋に面し、かつては胡椒の貿易で栄えた港町です。2004年12月26日に発生したマグニチュード9.1のスマトラ島沖地震と大津波で甚大な被害を受け、16万人以上が犠牲となりました。

独立派組織と政府との間で武力闘争が約30年間続いていましたが、津波を機に2005年12月に終結しました。2009年に開館したアチェ津波博物館は、世界から多くの人々が訪れる観光スポットになっています。

## 宮城県東松島市

仙台の北東にあり、東は松島町、西は石巻市に隣接、南は太平洋に面する人口40,310人(2016年11月1日現在)のまち。特産品は牡蠣、海苔など。市内には航空自衛隊松島基地があります。南部の宮戸島は景勝地「奥松島」東端の観光スポットで、「嵯峨溪」などを巡る遊覧船や、国内最大級の貝塚「里浜貝塚」、奥松島縄文村歴史資料館があります。

東日本大震災では、震度6強の揺れと津波に襲われ、市全体で1000人以上が犠牲となりました。被災したJR仙石線の野蒜駅(現在は高台に移転し全線再開)の旧駅舎を改装し、2016年10月に「震災復興伝承館」がオープンしました。

## インドネシア・アチェと宮城県東松島市の子ども国際交流プロジェクトのねらい

- それぞれ自分たちが暮らす地域の伝統・文化・景観などを映像として記録し、お互いに伝え合うことで、相手の文化を理解し尊重する姿勢とともに、自分への自信とふるさとへの誇りを育むこと。
- 被災という「負の経験」を、国際交流や情報発信の取り組みを通じて前進への原動力に転換すること。
- 子どもや若者が協力して取り組むことで、地域の活力が向上し、未来の担い手が育つこと。

東松島市の子どもたちが交流した子どもたちや若者たちが暮らすまち「アチェ」って、どんなところなのでしょう。

# 現代アーティスト門脇篤が紹介する アチェの歩き方

常夏のアチェに流れるのは、1日5回のお祈りと、「ワルン・コーヒー」と呼ばれる、いたるところにあるカフェで過ごすゆったりとした「アチェタイム」。どんなところにも猫が出入りし、カメラを向ければ笑顔でポーズをとってくれるおおらかさ。ポイ捨てされたゴミを見かける一方、シンプルで美しいテサインがあふれる通り。若者がこぞってスマホを手にする一方、手作り文化が色濃く残るまち。ココナッツがきいた辛いカレーに、歯が痛くなるほど甘いコーヒー。美しい海に新鮮な魚介類、そしてドリアン。バンタアチェの震災遺構などをめぐる被災地ツアーには、今も平日で1日300人、週末には千人が訪れる。いつでもオープン・マインドなアチェ人の心を表す「ピントゥ・アチェ（アチェの扉）」がシンボルの、うきうきわくわくに満ちた場所、それがアチェです。



門脇さんは、常にフィールドに身を置き、真摯に向き合う現代アーティストです。東日本大震災の被災地等でコミュニティ・アートを手がけています。その「ゆるい」スタンスは、アチェでも強力な感化作用、交感力を発揮し、アチェでのフィールドワークから、東北とアチェをつなぐコミュニティアートが生まれました。  
(渡辺裕一/地球対話ラボ 事務局長)



いたるところに warung (ワルン、屋台) が点在



アチェ料理はテーブル一杯に並べられた中から食べる



州都バンダアチェは新鮮で豊かな海の幸に恵まれている



旬には通りの至るところに果物の王様ドリアンが並ぶ



強烈な色彩と並べ方が目を引く warung



飲食店だろうと何だろうと至るところに猫が出没



アチェの住宅街には素敵なデザインの家がたくさん



アチェの結婚式は自宅前の通りを封鎖して盛大に開催

## アチェの若者団体による被災地スタディツアー 9月8日~12日 (5日間)

現地パートナー団体のKSAとTPMT (p16に詳細)は、7月に現代アーティストの門脇篤さんとアチェの震災遺構のフィールドワークを行い、「被災地スタディツアー」を企画。9月、日本の学生メンバーを迎えて試験的に実施しました。



日本の学生とアチェのメンバー (バンダアチェ空港)

- 9月8日 アチェ市内 津波博物館、内陸に打ち上げられた発電船(内部は展示施設)や屋根に船が載ったままの民家などを訪問。地引き網漁や港を見学。ゲストハウス泊
- 9月9日 アチェ市内 野菜市場・魚市場、復興した市内、オランダ人墓地、津波犠牲者の集団墓地を訪問。津波避難ビルの見学。KSAメンバー宅にホームステイ
- 9月10日 ランピラ村へ移動 TPMTで子どもたちと交流。工芸や菓子づくりを見学。TPMTメンバー宅にホームステイ
- 9月11日 ランピラ村滞在 ホストファミリーと行動 ホームステイ
- 9月12日 ランピラ村滞在 イスラム教の犠牲祭の行事を見学

### ●スタディツアー参加学生の感想から

「英語にしか興味がなかった私ですが、アチェのみんなと関わって、インドネシア語に興味を持ちました」  
(大学生メンバー 倉成由佳/法政大学3年)



「今まで抱いていたインドネシアやイスラム教へのイメージが大きく変わりました」  
(大学生メンバー 清水南美/法政大学3年)



ウレレ海岸「奇跡のモスク」で12月26日に行われた津波12周年セレモニー



市内には津波のため身元を確認できないまま埋葬された人の集団墓地が点在する



市内各所に設置された津波時の避難経路を示す標識



上空から見たバンダアチェのようす



活気にあふれるバンダアチェようす



●屋根に船が乗った民家  
ランプロ村。この船に乗り込んで多くの人が助かった

インド洋

バンダアチェ

● 奇跡のモスク  
ウレレ海岸に立つ  
バイトゥラヒンモスク

● アチェ津波博物館  
被災地ツアーのゲイトウェイ

● グランドモスク  
アチェの中心バイトゥラハマンモスク

● 内陸に打ち上げられた発電船  
プングブランチェ村。内部が展示室になっている、津波の威力を今に伝える震災遺構

● エスケープビル  
合計7つの津波避難ビルがある

● KSA  
ペカンバダ村。p16 参照

● 伝統的なアチェハウス

● ランピラ村

TPMT (p16 参照)

# 宮戸島地域での活動

地球対話ラボは 2015 年度、学生サポーターと共に宮戸小学校の最後の 1 年を記録する活動に取り組み、学校や地域の伝統行事などを動画で撮影し、広報紙やDVDにして地域の人々に届けてきました。また、インターネット上に「記憶のひろば」というサイトを開設し、記録を保管、島を離れた人などがネット上で交流できるよう計画中です。2016 年 3 月 31 日で宮戸小学校は閉校しましたが、宮戸島地域での活動は 2016 年度以降も続けたいと思っています。

## 第 6 回宮戸夏まつりに「アート屋台」



「ワレイ子うちわ」づくりに熱中する子どもたち

日時：8月6日(土) 15:00~20:30  
 会場：奥松島縄文村歴史資料館 敷地内  
 主催：宮戸夏まつり実行委員会

コンサートや盆踊り、島内の 4 つの浜が味を競う屋台、花火大会などで盛り上がり、島外からも多くの人々が訪れるイベントです。地球対話ラボは、仙台の現代アーティスト門脇篤さんの協力で、「キッズランド」コーナーに「アート屋台」を出店。「ワレイ子うちわ」作りのワークショップと駄菓子屋で、子どもごころをわしづかみにしました。大学生サポートメンバー 3 人も楽しみながら屋台の運営を手伝いました。参加した子どもは 70 人でした。



できあがった「ワレイ子うちわ」



好きな材料を好きなだけ使っていい時間



## 「子ども記者になってインドネシアの若者と宮戸島を探検しよう」



参加者募集チラシ

日時：8月21日(日) 10:00~17:00  
 会場：宮戸市民センター、宮戸島全域  
 主催：地球対話ラボ



インドネシアからイスナンさん、サフリアンさん、ラウダーさんが来日。東松島市全域から公募した小学生 8 人が、門脇篤さんの指導で「子ども記者」として活動しました。iPod touch でアチェの 3 人にインタビューした後、いっしょに宮戸島を巡り、海水浴場やお寺、史跡などを取材。映像レポートは会場で上映し、保護者にも見てもらったほか、インターネット (<http://miyato.info>) で世界に発信しています。大学生メンバー 3 人と、実習で宮戸島に来ていた法政大学の学生が、記録や引率、動画の編集などをサポートしました。



イスナンさん(右)にインタビュー



サフリアンさん(右)にインタビュー



宮戸島のお年寄りやお寺の住職にお話を聞く子ども記者たち



### 声 「お兄ちゃん、津波で」

私が担当した女の子は、はじめは話しかけても全く答えてくれませんでした。会話やボディタッチをしながら、心の距離がだいぶん近づいたお弁当の時間。その子は突然、「私のお兄ちゃんは、いないんだ。津波で死んじゃったんだ」と話し始めました。私はとても驚き、困惑しましたが、彼女の一言ひとことをつらつら聞き取りました。それを見ていたイスナンさんが「彼女はなんて言ってるの？」と質問してきました。それまでの話をすると、彼はとても心を痛めたように見えました。小学生の時に津波に流された自分の過去と、彼女の経験が重なったのでしょうか。彼女にたくさん話しかけ、ふれあいを心がけてくれました。(大学生メンバー 岡田優紀/宮城学院女子大学3年)



## 宮野森小学校の国際交流活動

宮野森小学校 新校舎  
写真提供：宮野森小学校

東松島市立宮野森小学校は、旧宮戸小学校と旧野蒜小学校が統合して2016年4月に開校した、全校児童144人の新しい学校です。ふたつの学区はともに大きな津波の被害を受けました。当初は旧野蒜小学校のプレハブ仮設校舎で開校しましたが、2017年1月から集団高台移転地である野蒜北部丘陵の新校舎で子どもたちは学んでいます。



旧宮戸小学校の国際交流活動を引き継ぎ、2016年度は6年生がアチェとの交流を行うことになりました。8月に事前学習としてアチェから来た若者たちとの交流、12月にアチェの小学生とスカイプ対話を行いました。さらに、当初は予定していなかった特別支援学級・4年生・5年生でも、それぞれのテーマでアチェと交流を行うことができました。

各学年の交流について、国際交流担当の小鹿朝絵先生と、旧宮戸小からスカイプ交流に取り組んできた宮崎敏明先生に報告していただきました。(p10-11)



旧宮戸小学校



旧野蒜小学校 仮設校舎 (2016年12月まで宮野森小学校としても使用されました)



アチェから来た3人と日本の学生3人を紹介

## アチェの若者たちとの交流ワークショップ

8月24日(水) 9:30~11:30 夏季学習会  
宮野森小学校 仮設校舎 音楽図書室  
6年生40名とイスナン、サフリアン、ラウダーの3人  
1組担任 安海武英先生、2組担任 鎌田貴子先生

12月の子ども同士のスカイプ対話に向けた事前学習として、来日中のアチェの若者たちと6年生が交流しました。アチェ伝統の祭礼衣装で登場した3人が、アチェの地理や社会、祭や食べ物などの文化について、写真や実物、体験を交えて紹介。ある有名な建物の写真を見て「何の建物でしょう？」というクイズでは「市役所?」「宮殿!」などの回答が出ました。正解は「グランドモスク」。イスラム教の礼拝所でした。休憩時間にも子どもたちが3人それぞれを囲み、食べ物の辛さや服装のことなど、より詳しく知りたい様子が質問していました。

3人は最後に、2004年12月26日の大津波によるアチェの被害と町の復興の様子、観光地になっている津波遺構(民家の屋根に載ったままの船など)を紹介。「震災はいつでも起こりうるからいつでも備えていよう」、「自分たちの文化を大切にしよう」と伝えました。子どもたちは熱心にメモをとっていました。



イスナンさん(左から2人目)に質問



ラウダーさん(手前左)に質問



アチェのお菓子やコーヒーの紹介

### 声

#### 「スマトラ島の津波に教えられて、私の家族は助かった」

交流会の終了後、ひとりの女性が学校を訪れ、次のように語ってくれました。「震災の時、私たち家族は避難所に避難しましたが、そこを出ました。そのあと津波が来たと聞きました。2004年のスマトラ島の津波の時、ニュースで見た映像が脳裏に焼き付いていました。子どもたちに地図でスマトラ島を見せ、もし宮城県沖が震源だったら、ここにはきっと大きな津波が来る、高い所に逃げるんだよ、とくり返し教えました。だから、スマトラ島の津波のおかげと言うのも変かもしれませんが、私たち家族は助かったのです。アチェのみなさんは、津波で大変な苦勞をされたと思います。それを乗り越えて、こうして子どもたちに話をしてくださった。そのことに本当に感謝しています。インドネシアと日本と、離れているのに、つながっている、こういうつながりが大事だと思います」(小川直美/地球対話ラボ 理事長)

## 6年生の対話

## 「アチェの人に東松島の良さを伝えよう」

2016年12月16日(金) 10:30~12:05  
 宮野森小学校 仮設校舎 6年1組教室  
 宮野森小学校 6年生 40名  
 アチェのコウゲツスクールで日本語を学んでいる小学4~6年生 16名  
 1組担任 安海武英先生、2組担任 鎌田貴子先生、  
 国際交流担当 小鹿朝絵先生

子どもたちは自分たちの地域の史跡や伝統行事、自然などを調べ、アチェの人に分かりやすく伝えようと準備してきました。対話の当日は、宮野森から「スラムツバギ!」、アチェから「こんにちは!」のあいさつでスタート。前半はアチェの子どもたちが、有名な建物(モスク)、昔の道具(脱穀機)、津波博物館の展示についてクイズで紹介してくれました。後半、宮野森の番になり、「ツリーハウス」、「里浜貝塚」、「東名運河」など、子どもたちは緊張しながらも話し、アチェの子どもたちが驚いたり頷いたりしてくれるのをうれしそうに聞いていました。

一番盛り上がったのは気温の話です。アチェ「日本は今どんな季節ですか」日本「季節は冬で雪が降ります。気温は5度くらいです」アチェ「ええ~!!」日本「そちらは今何度ですか」アチェ「31度です」日本「えええ~!!!」お互いに大発見だったようです。最後にはお互いの国歌を歌い合いました。

宮野森小の子どもたちにとって、とても刺激的で、世界を知る第一歩となった1日でした。(小鹿朝絵)

## 宮野森小の子どもたちの感想から

「スカイプを通して話したけど、実際にそこにいるように感じました」  
 「アチェの小学生はみんな元気で、反応が大きくて楽しそう」  
 「またいつか交流してほくの顔を覚えてほしいです」



ツリーハウスの紹介



モニターに向かって手を振る子どもたち



全員が画面に映るように、まとまって座りました

## 特別支援学級の対話

「インドネシア・アチェのお友達とテレビ電話でお話しよう  
~話するとき、聞くときの大事なことをもとにお話しよう」

2016年10月31日(月)  
 宮野森小学校 仮設校舎 わかば2組教室  
 宮野森小学校 わかば学級児童 4年生1名、5年生1名  
 アチェのコウゲツスクールで日本語を学ぶ小学生 6名  
 担任 宮崎敏明先生

特別支援学級の子どもたちは、宮野森小の先頭を切って、10月にスカイプ対話の本番を行いました。アチェの日本語教師ハナフィさんとSNSやスカイプで打合せを重ね、9月には、日本や宮野森小の行事を色紙に書いてアチェに送ったり、ビデオレターを作成したりしました。

そして迎えた本番。初めて見るアチェの子どもたちに、やや戸惑う宮野森小の子どもたち。しかし、その目は輝いていました。笑顔で自己紹介もできました。「ここまではいいのだ」そう思いながら、互いに好きな食べ物を教え合う子どもたちを私は見守っていました。

それは、事前にアチェに送ってあった日本のお菓子を画面越しにいっしょに食べたときに起こりました。宮野森小の子「味はどうですか?」アチェの子「イチゴ味がおいしい」などといった対話が、まるで互いに目の前にいる子と話すかのように、間髪入れずに進んでいきました。

スカイプでアチェの友だちと話したということが自信につながり、その後の学校生活での自己肯定感が大いに高まった特別支援学級の子どもたちです。(宮崎敏明)

## 宮野森小の子どもたちの感想から

「またアチェの子とお話したい」  
 「スラムツバギというあいさつや、ナマサヤという名前の言い方がわかった」  
 「お家の人にアチェのお友だちとしゃべったと教えたい」



宮崎先生と、アチェの子どもが映るモニター画面



対話を楽しむ子どもたち

## 4年生の交流

「アチェと東松島  
それぞれの一日の生活を絵で見て交流しよう」

2016年12月19日(火)  
 宮野森小学校 仮設校舎 4年1組教室  
 宮野森小学校 4年生 26名  
 アチェ州ランピラ村の小学4~6年生 26名  
 担任 高畑由紀子先生、国際交流担当 小鹿朝絵先生

地球対話ラボの大学生メンバー岡田優紀さんの企画が実現し、4年生が絵画を通じてアチェの小学生と交流しました。岡田さんがアチェの小学校でワークショップを行い、1日のある時間の生活の様子をひとり1枚ずつ描いた絵を持ち帰ってくれました。帰国したばかりの岡田さんをゲストティーチャーとして招き、ビデオや絵を見ながら、アチェの生活についてお話を聞きました。

中でも子どもたちが驚いていたのは、朝5時くらいに起きること、勉強熱心なこと、1日に何回もお祈りをしていることでした。アチェの子から学ぶことは多かったようです。絵を交換することで、言葉の壁のないコミュニケーションを実感した交流でした。宮野森でも同様に自分たちの1日の生活を描いて、郵便でアチェに送り、ランピラ小学校で見てもらいました。(小鹿朝絵)

## 宮野森小の子どもたちの感想から

「絵が上手かったです」  
 「鳥を自分たちで育てるなんてびっくりです」  
 「アチェの子は家の人の手伝いをするなんてすごいなと思いました」



4年生の教室の様子



アチェの子どもを紹介する岡田優紀さん



ビデオの中で自分が描いた絵を紹介するアチェの子

## 5年生の対話

「アチェの米作りについて学ぼう  
~日本とインドネシアで米作りについて交流しよう」

2017年1月13日(金) 45分間  
 宮野森小学校 新校舎 5年1組教室  
 宮野森小学校 5年生 22名  
 アチェのコウゲツスクールを運営するNGO)メンバーの大学生たち  
 担任 高橋馨先生

「アチェに行ってみてみたいなあ」と書かれた1行の文。ふだん自分の気持ちを素直に表せない女の子の感想です。

宮野森小では5年生が社会科で米作りに取り組んでいます。馬を使った耕作など昔の稲作も体験し、秋に収穫を行いました。6年生がアチェと交流していた関係で、インドネシアでもお米を食べることを知り、お互いの米作りをテーマに対話することになりました。

子どもたちは東松島市での米作りの様子や、自分たちで収穫した米で作ったクッキーや海苔巻きなどを紹介しました。インドネシアの米は細長いこと、アチェでは田んぼの耕作に水牛を使うこと、日本では見ない色のケーキの紹介に、子どもたちは目を丸くしていました。時間が足りず、予定していた内容を全て話すことはできませんでしたが、終了後にナシゴレン(インドネシアの米料理)を試食したり、アチェの大学生が制作したお米のケーキ作りの動画を見たりして、子どもたちはアチェの食文化に高い関心を持ちました。冒頭に紹介したのは、その後の感想の一つです。(宮崎敏明)

## 宮野森小の子どもたちの感想から

「日本の米はインドネシアの米よりも育つのが遅くて驚いた」  
 「米の形やにおいがちがっていたのでびっくりしました」  
 「ラビスクッキーの色に興味があるので作ってみたい」



対話は木の香りに包まれた新校舎で行われました



授業のあと、ナシゴレン(インドネシアの焼飯)を試食

## 交流をふりかえって



手を挙げて質問する6年生（右は小鹿先生）



アチェの若者3人との記念写真（8月の交流で）

## ふるさつを見つめ、世界と向き合う子どもたち 小鹿朝絵

今年度のアチェとの交流は私にとって新しい挑戦でした。国際交流担当になって3年目ですが、宮戸小学校での交流とは児童の人数や実態、インターネット環境も違い、進め方に不安がありました。宮野森小学校で初めての事前授業では、東日本大震災の後から宮戸小学校でアチェと交流してきたこと、アチェもスマトラ島沖地震で津波の被害があり、お互いの地域のことを知って励まし合おうと話しました。

8月にはアチェから3人の若者が来て、アチェでの生活や文化、津波の経験などを話してくださいました。子どもたちは興味深く聞き、「リオオリンピックでメダルを何個取りましたか」とか、「アチェにもポケモンGOはありますか」など、時事的な質問も出ました。休憩時間に自分から話しかける子どもたちの姿からは、異なる文化や人への興味・関心が高まっているのを感じました。

12月のスカイプ交流では、子どもたちの伝えたい言葉が多くて、通訳のハナフィさんに苦労をかけてしまいました。時間配分にも課題が

あり、内容を絞ったり方法を工夫する必要があるとわかりました。

当初は、子どもたちのコメントの中に、相手を「遅れた地域」と見るものが、少数ですがありました。しかし若者との直接交流、子どもとのスカイプ交流の後のふりかえりでは、それが消えました。子ども同士だからこそ通じ合うものもあるようでした。6年生の活動をきっかけに、5年生や4年生でも交流を行い、学校全体に少しずつアチェや外国への関心が高まってきています。

震災により地域の様子が変わって行く中で、自分たちのふるさとの良さをもう一度見つめ直し、アチェに発信した経験は、これから地元を復興していこうとする意識につながると思います。また、世界には様々な人々がいて様々な生活があることに気付き、広い視野で物事を考えていく手助けとなったと思います。これからもアチェとの交流を通して、子どもたちの成長を見守りたいです。

## スカイプ対話という教育実践

宮崎敏明

「スカイプ対話は、特別支援学級の子どもたちにとって本当に必要な教育なのだろうか…」このような迷いが4月にはありました。しかし、相手の話を基にして感じたことを話す等のコミュニケーション能力に課題がある子どもたちだからこそ、アチェの子との対話は突破口になると信じ、準備を重ねてきました。たとえば色紙やビデオレターづくりは、基本的なコミュニケーション・スキルの習得につながる学習となりました。

「突破口」の瞬間は、アチェ側と同時に日本のお菓子を食べた時。「味はどうですか？」と自然な問いかけが生まれ、アチェからの応答によって会話が続いたのです。子どもたちの感想からも、この実践を楽しみ、自信をつけたことが見て取れます。また、他の学年に先駆けてアチェと交流し成果を出したことで、普通学級の子どもたちにも「わかばの子はすごい」「自分たちもやりたい」という雰囲気が生まれました。

もうひとつ、私には特別支援学級で取り組む理由がありました。2013年から宮戸小学校で子どもたちと共にスカイプ対話を経験してきて、この教育実践は「子どもたちの思考が活性化し、真剣に課題に立ち向かう状況をつくる」という実感を宮野森小学校の先生方に伝えたいという思いです。ちょうどこの授業を10月の県教育事務所による学校訪問指導で行うことができ、先生方にも知ってもらうことができました。12月の6年生の授業に向けて、対話の具体的な方法や内



5年生の米作りの様子

容を示す機会ともなりました。

さらに、6年生の授業を見た5年生の担任が、米作りをテーマとしたアチェとの交流に教育的価値があると考え、急速1月の対話へと連鎖していきました。

5年生の対話では、外国の稲作や食文化への興味・関心が高まったこと、聞き手を意識した話し方など表現力の向上や、相手に伝わりやすい見せ方を工夫する意欲が見られたと報告されています。こうした評価からも、「スカイプによる対話は、子どもたちの思考が活性化し、真剣に課題に立ち向かう状況をつくる」。この私の実感を、宮野森小学校の先生方と共有することができたのではないかと考えています。

## アチェの子どもたちにとっての対話交流

アチェ側コーディネーター・通訳

ハナフィ (HANAFI)

日本語教師 / KSA (Kougetsu School Association) 顧問



スカイプで話すハナフィさん



宮野森小6年生と対話交流した子どもたち



KSA事務所で日本とスカイプ会議



宮野森小6年生とのスカイプ交流



スカイプ画面に映る宮野森小の子どもたち



門脇さんによるフォトフレームづくりワークショップ

私はアチェの子どもたちのプログラムのコーディネーターとして、2014年から地球対話ラボと協力を始めました。

最初にこの交流プログラムを知ったとき、アチェで小学校の生徒たちとただ遊ぶためだけに、なぜ日本人はお金を捨てたいのかと考えました。しかし私のその考えは大きな間違いだと気づきました。ずっとこのプログラムに参加してきて、このプログラムでアチェ人も日本人も、たくさんの良いことを得ているのがわかりました。特にアチェ人と日本人の子どもたちの将来についてです。私はこのプログラムにずっと関わっていきたくと思っています。

このプログラムでアチェの子どもたちはたくさん新しいことをもらいました。

たとえば・・・

- ・彼らは日本の新しい友だちができました。
  - ・日本の子どもたちの生活の知識と文化が、彼らの勉強になりました。
  - ・日本の友だちとコミュニケーションをとるための方法と道具を得ました。
  - ・アチェの子どもたちは、外の世界の友だちに、アチェの彼らの生活をどうしたら見せることができるかという方法も得ました。
- ほかにもアチェの子どもたちが得た良いことは数え切れないほどたくさんあります。

アチェの子どもたちは、この対話に参加してから変わりました。アチェの子どもたちは孤独を感じることはありません。彼らは世界にたくさんの友だちがいます。津波と同じ運命の友だちがいます。日本の友だちとコミュニケーションをとることができて、彼らの考え方が変わりました。彼らは互いに愛し合い、互いに助け合い、友だちを困らせたくない、戦争をしたくない、互いに殺し合いたくない、彼らは友だちのようにそれぞれの国でこの世界で平和を作りたい。友だちがいたら、この世界の中にある問題にもっと勇敢な気持ちで立ち向かえます。

この対話は本当に素晴らしいです。子どもたちがまだ幼いときから、彼らが将来に向けて正しい道を探すのを手助けすることができると思います。

この対話の相手を、小学校の生徒たちだけではなく、中学生、高校生、大学生や普通の人、たとえば年をとった人ともやってほしいと思います。おそらく彼らを誘えば、もっとたくさんのお話からいろんな人の深い経験を聞くことができると考えています。

私の希望は、このプログラムをアチェですべてやってほしいということです。

ありがとうございました。



コウゲツスクールの子どもたち。右は学生メンバーのティアさん

## 地球対話のつくりかた ～宮戸小・宮野森小の巻～

宮戸小や宮野森小で行ってきたスカイプによる国際理解教育の手順の大まかな流れや、留意点をまとめました。(宮崎敏明)

## 1 学習場所

普通教室がよいと思います。模造紙を広げたり、特色ある生活習慣の実演をしたりする場合もあるので、机や椅子が移動しやすいと便利です。

## 2 準備物

プロジェクターとスクリーンまたは大型モニター、ドラムコード、パソコン、スカイプ用マイク・カメラ、大型スピーカーなど。インターネット接続環境は必須です。大きな画面と音声によって、目の前に外国の子がいるような臨場感をつくり出すことが子どもたちの気持ちを高めます。

## 3 スカイプのセットアップと通信テスト

学校のスカイプIDをつくり、担当の先生方と事前に通信テストを行うとよいです。パソコンや通信環境によって、画像は見えるが音声は聞こえないなど不具合が起こることも。パソコン本体とスカイプ両方の設定を調整してみましょう。本番の1週間前、当日の授業開始1時間前にも、双方が本番で使うのと同じ環境でスカイプのテストをしておきます。

## 5 1か月前の打合せ

直接対話に向けて、役割分担、知りたいこと、伝えたいこと、特に思考活動させたい場面などを打ち合わせします。スカイプやSNS等を活用して、関係者と情報を共有することが大切です。協働的活動は教師自身もきくと楽しいですよ。



機材セッティングと通信テスト (2015年)



ブータンと地球対話 (2013年)

## 4 授業のための準備

相手先との基本計画の打合せは、前年度、もしくは新年度初期に行った方が慌てません。スカイプを使えば海外の相手と直接話し合いができます。まずは大人も地球対話を楽しみませんか？  
宮戸小・宮野森小では、スカイプ対話を含めた総時数は、総合で8時間ほどです。対話に向けた授業計画細案は、相手国の言語、もしくは日本語、英語等を状況に応じて使い、作成します。困ったときには、関係者にすぐに相談します。相手先の文化や事情もあり、こちらのイメージ通りに行かなくて当然。だからこそ、教師も対話を重ねることが大事です。お互いの写真や名前を事前に交換しておく、子どもたちの関心が高まります。通訳が入るので、対話本番は通常授業の倍以上の時間がかかる点に注意が必要です。動画や写真の活用は時間短縮につながります。事前にクラウドを活用して相手側にデータを送っておくと便利です。

## 6 対話の当日

本番では、質問や回答などの言葉は短く簡潔にし、通訳が入ることを特に意識しましょう。「笑顔で、はっきりと」はもちろんですが、相手が話しているときに、「名前を呼ぶ・うなづく・驚く・感想を話す」などといったリアクションを、間髪入れずに行うことがとても大切です。一期一会の出会いです。学習を越えた心の対話になったら素敵ですね。  
発表や質問の練習も大切ですが、それを発表するだけでは…。対話の後の「質問や感想」が子どもたちから自然に発せられることが大切です。そのためには教師の授業力が試されます。ちなみに宮戸小では5W1Hを感想や質問の視点にして、子どもたちの思考活動が活性化しました。



地球対話の最後にあいさつ (2013年)

## 地球対話ラボ 宮戸島・東松島市の子ども国際交流 2012-2017

## 2012

9月5日 宮戸小学校を訪問し、国際交流事業での協働について打ち合わせ。

## 2013

宮戸小学校とブータンのゲドゥ小学校との交流 (協力:小森次郎さん/JICA 専門家 (当時))

2月13日 ブータンのゲドゥ小学校と Skype 対話

6月22日 「島の小学校と震災～宮崎先生のお話を聞く会」を大田区の被災地支援団体等と共同で開催

宮戸小学校とアチェとの交流 (1年目)

大学生サポートチーム第1期 (3名) の活動

8月 宮戸小でアチェを知るワークショップ

9月 アチェを訪問、9月17日にペカンパダ小学校との Skype 対話1回目を実施。

大学生サポートチーム第2期 (2名) の活動

11月 アチェを訪問、12月2日にペカンパダ小学校との Skype 対話2回目を実施。

## 2014

3月8日 講演会「地域は災害時に子どもとどう向き合うのか～東松島市「宮戸復興チルドレン計画」宮崎敏明さんに聞く」を開催。(大田区教育委員会家庭地域教育力向上支援事業)

宮戸小学校とアチェとの交流 (2年目)

日本とアチェで学生8名ずつのサポートチーム「チームAJ」(A=Aceh、J=Japan) が活動

8月 チームJと宮戸小教員の宮崎さんがアチェを訪問、ビデオや図画工作のワークショップ

8月19日～27日 チームAの学生3名が来日。宮戸小で交流ワークショップ。福島、東京を訪問。

9月16日 アチェのペカンパダ小学校と Skype 対話1回目を実施。

12月18日 アチェの若者との Skype 対話を実施。

12月21日 ペカンパダ小学校との Skype 対話2回目を実施。

## 2015

3月1日 東京で活動報告とトークセッション「宮戸島とアチェ～未来をつくる子どもたち」を開催(ゲスト:宮崎敏明さん、NPO法人良心、市民の会理事李澤玄さん)

宮戸小学校とアチェとの交流 (3年目)

第2期チームAJ (日本側7名・アチェ側11名) が活動

閉校を翌年3月に控えた宮戸小学校の「最後の1年」を映像に記録する活動に通年で取り組む。

8月 チームJと宮崎敏明さんがアチェを訪問。被災地フィールドワーク、小学生と映像制作ワークショップ、壁画「10年後のアチェ」共同制作を指導。

8月17日～31日 チームAの学生2名が来日、宮戸小で交流ワークショップ。福島、東京を訪問。

12月17日 アチェ州ランピラ村の小学生と Skype 対話

## 2016

2月21日 宮戸小学校閉校式

3月5日 東京で「学生による2015年度アチェ宮戸活動報告会」を開催。(ゲスト:宮崎敏明さん、小鹿朝絵さん)

4月 宮戸小と野蒜小が統合し、宮野森小学校が開校。プレハブ校舎で授業開始。

宮野森小学校とアチェとの交流 (宮戸小から通算4年目)

第3期チームAJ (日本側3名・アチェ側21名) が活動

7月14日～24日 現代アーティスト門脇篤さんがアチェを訪問。若者、住民らとアート企画の準備。

8月6日 宮戸夏まつりに参加 (門脇篤さんによるアートワークショップ)

8月18日～28日 アチェから若者3名が来日。宮戸島探検イベント、宮野森小6年生との交流、宮城・福島の被災地や東京を訪問。

9月5日～15日 東京の大学生2名がアチェを訪問。若者が企画した被災地スタディツアーに参加。

10月31日 宮野森小特別支援学級とアチェの Skype 対話

12月 門脇篤さんと仙台の大学生1名がアチェを訪問。

12月16日 宮野森小6年生とコウゲツスクールの Skype 対話

12月19日 宮野森小4年生とアチェ州ランピラ村の子どもたちが絵画を交換して交流

壁画の架け橋プロジェクト コミュニティ・アートプロジェクト

10月9日 旧宮戸小学校の壁画「10年後の宮戸島」を修復し、アチェへ向けて発送

12月18日 アチェ津波遺構の発電船で地域住民と交流 (おしるこカフェ)

12月24日 アチェ津波博物館で宮戸小学校とアチェの子どもの壁画を展示、公開

12月24～26日 アチェ津波遺構の発電船でコミュニティアート展示

## 2017

1月13日 宮野森小5年生とアチェの大学生たちが「お米」をテーマに対話

3月5日 東京で「インドネシア・アチェと宮城県東松島市の子ども国際交流 2016 報告会」を開催。(ゲスト:宮崎敏明さん、小鹿朝絵さん、門脇篤さん)

## アチェの若者たちと共に

アチェで活動する2つの子ども支援団体、KSA と TPMT は、2014 年から地球対話ラボの現地パートナーとして、交流プロジェクトに協力。双方から選ばれた活動メンバーがチームをつくり、子どもたちの交流や地球対話、アートワークショップなどの運営サポートに取り組んでいます。毎年メンバーのうち数名が来日し、宮戸小学校、宮野森小学校との交流や、日本の学生サポーターとの活動を行っています。

2016 年のチームは、中心メンバー 10 人、サポートメンバー 11 人。3 年目となり、宮野森小学校の特別支援学級との対話、5 年生との対話を、日本からスタッフを派遣せず、彼らだけで実施することができました。



KSA のメンバー (東日本大震災追悼イベント)

### KOUGETSU SCHOOL ASSOCIATION (KSA)

小学生から高校生まで無料で学べる英語・日本語の語学学校「コウゲツスクール」のOBOG組織。メンバーは子どもたちに英語や日本語を教えるボランティアとして活動しています。語学学校は、日本の NGO がスマトラ島沖地震で被災した子どもたちの支援のために開設したものです。2016 年からは、KSA が語学学校の運営と震災孤児向けの奨学金事業を担うことになり、NGO として正式に登録して活動を開始しました。

### TPM Tanyoe (TPMT)

団体名の Tanyoe (タンヨエ) は、アチェ語で「わたしたちの村」という意味。バンドアアチェから車で 1 時間弱のランピラ村で、地元出身の大学生が、子どもの放課後活動の場として立ち上げました。インドネシアの若者社会起業コンテストでグランプリを受賞したこともあります。「私たちの私たちによる私たちのための教育」をスローガンに掲げ、大学生ボランティアが、学習支援やさまざまなアクティビティ、イスラム教学習、図書館運営などを行っています。



高床式の TPMT 図書館で、子どもたちと学生ボランティア

### 「成長したなあ〜」

12 月に、2 年ぶりにアチェで会った彼らは、前と比べ見違えるほど成長していました。たとえば、対話を組み立てる流れを把握していること。2 年前は言われたことに対して動くという感じでした。宮野森小とのスカイプ対話は、子どもたちが話しやすいような席順を考えたり、できる限りのサポートをしていました。保護者への連絡(授業を休むことになるので)のためのドキュメントも、しっかり作っていました。振り返りのミーティングで、今後やってみたいこととして、ラウダーが、「演劇をやったらいんじゃないか」と提案する場面も。そういう提案が出ることも成長点だと思います。(中川真規子 / 2013 年、宮戸小ブータン対話ファシリテーター、2014 年と 2016 年の対話ではアチェで活動をサポート。地球対話ラボ 理事)

## アチェの若者たちが見て感じた東北の被災地



石巻市の大川小学校旧校舎の前で話すイスナン



### 「大川小学校旧校舎はぜひ残してほしい」

私も小学生の時に津波にのまれた経験があり、このような建物を見るとつらくなります。遺族の方々が見たくない気持ちはわかります。でも私はこの場所をぜひ残してほしいと思います。例えばこの場所の一部を改修して、中で防災活動などをやってみよう。訪問者はより前向きな気持ちになるのではないのでしょうか。(イスナン)  
※2016 年 3 月、石巻市は大川小学校旧校舎を震災遺構として保存すると発表しています。

- 8月18日(木) イスナン、サフリアン、ラウダーの3人が仙台空港に到着
- 8月19日(金) 奥松島縄文村歴史資料館を見学  
せんだい 3.11 メモリアル交流館で語り部の被災体験を聞く。トークイベント「スマトラ沖地震と東日本大震災〜インドネシア・アチェの若者たちをむかえて〜」(主催:一般社団法人 MMIX Lab) で3人も自分の被災体験を語った。
- 8月20日(土) 宮城県石巻市の被災地を見学(大川小学校旧校舎、日和山、南浜地域、鈴木造船所、西浜町津波避難タワーなど)
- 8月21日(日) 「子ども記者になってインドネシアの若者と宮戸島を探検しよう」(p4に報告あり)
- 8月22日(月) 福島県の被災地ツアー(主催:NPO 法人野馬土)に参加し、南相馬市小高区、浪江町沿岸部を見学
- 8月23日(火) 宮野森小学校での交流会の準備
- 8月24日(水) 宮野森小学校6年生と交流会。仙台市内の高齢者施設などを見学
- 8月25日(木) 東京に移動
- 8月26日(金) 学生メンバーと都内自由行動
- 8月27日(土) 大田区内でホームステイ(協力:NPO 法人PoE International Exchange)
- 8月28日(日) 成田空港から帰国

写真上から、仙台市でのトークイベント、石巻市日和山、鈴木造船所、日本の学生たちと(後方の建物は浪江町役場)

# 壁画の架け橋プロジェクト



アチェ津波博物館に展示された壁画。左：「10年後のアチェ」 右：「10年後の宮戸島」

## 子どもたちの夢や希望は、海を越えて

東松島市立宮野森小学校 教諭（旧宮戸小学校 教諭） 宮崎敏明

平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災で、宮戸島の 3/4 の浜と家屋が津波で流されましたが、宮戸小の子どもたちは奇跡的に全員が無事でした。

震災直後の平成 23 年度の春、保護者や教師は児童の心のケアを重ねてきましたが、子どもたちの心の痛みは、家庭や学校において様々な問題行動となって表れていました。この現状を打開したいという思いから、「10年後の宮戸島を図工で表現させたい」と、教員が一丸となって「宮戸復興プロジェクト C（チルドレン）」を始動させました。全校児童一人一人が描いた絵を、およそ半年をかけてひとつの作品にまとめ、ペニヤ板 4 枚分の壁画「10年後の宮戸島」が完成しました。避難所だった体育館に展示されると、声を震わせながら見る保護者や、涙を流しながら絵を見て、瓦礫のある浜へと作業に戻っていった島民の姿がありました。そこには、高層ビルや多くの交通機関が往来する未来都市ではなく、宮戸島の豊かな漁場、緑豊かな宮戸島の景色そのものが描かれていたからでした。

この壁画は、島を訪れた支援団体や被災地視察の方々を動かしました。その一つが外国の子どもたちとの交流に取り組む地球対話ラボでした。

地球対話ラボとの出会いから、「世界一幸福な国」ブータンや、2004 年にスマトラ島沖地震で大きな津波被害を受けたインドネシア・アチェとの造形活動やスカイプ対話が実現。その中で子どもたちは自分の願いや思いを見つめ、外国の友だちに伝える表現力を自ら育んできました。「10年後の宮戸島」はアチェ津波博物館に受け入れられ、アチェの子どもたちによる壁画「10年後のアチェ」と並んで、恒久展示されることになりました。

こうして、小さな島の教育実践が、新たに夢や希望を生み出しました。宮戸小の思いは宮野森小という新たな学校へと引き継がれ、アチェでは津波被災地を訪れる世界中の人々に、子どもたちの絵が語りかけています。

日本で、世界各地で、大地震や災害が起こっています。先行きに希望がもてないと言われる中、子どもたちの夢や希望は国を超え、世代を超えてつながっていると強く感じます。そのつながりを勇気に変え、これからもそれぞれの地で、できることに精一杯取り組んでいきたいと思っています。



宮戸小学校の全児童と 1 人ひとりが描いた「10年後の宮戸島」（2011 年）



将来の自分の姿を粘土で表現した宮戸小学校の児童作品（2014 年）

## アチェ津波博物館に子どもの壁画を展示



宮戸小学校の壁画と子どもたち（2012 年）

2004 年のスマトラ島沖地震で津波により甚大な被害があったアチェ州は、世界中からの支援で復興しました。2009 年に開館した津波ミュージアムは、アチェにおける被災地ツーリズムの中心的な施設で、インドネシア国内はもとより海外からも多くの人々が訪れる人気スポットです。

### 声

#### 「同じ思いを共有できたら」

旧宮戸小学校体育館の壁から壁画を取り外し、アチェに向けて発送する日。作業を手伝いに来てくれた住民の方は、「描いた子どもたちが大きくなってアチェに見に行く、現地の人と交流する、同じ思いを共有する。そういうことができればいいな、と思っています」と話していました。（小川直美／地球対話ラボ 理事長）

#### 「未来を考えることの意味がわかった」

はじめに地球対話ラボから壁画をつくと聞いたときは、なぜこのようなことをするのか理解できませんでした。しかし実際に子どもたちが 10 年後の自分の姿や町のことを想像して、それを壁画に仕上げて行く様子を見て、未来を考えることの意味や大切さがわかりました。（アミール／TPMT メンバー）



アチェの壁画の額縁は校庭で制作

## 伝わる、つながる、たくさんの想い

中川真規子

2013 年、宮戸小ブータン対話ファシリテーター。2014 年と 2016 年の対話ではアチェで活動をサポート。地球対話ラボ 理事。



壁画の補強作業（左から KSA のアブラールさん、門脇さん、ハナフィさん）



津波博物館の内部の様子

宮城県宮戸小とアチェの子どもたちそれぞれが未来を描いた壁画をアチェにある津波博物館に展示し、来館者に震災の経験と未来への希望を伝えることを目的とした「壁画の架け橋プロジェクト」。2016 年 12 月 24 日、2 枚の壁画は津波博物館に展示されました。

壁画のフレームを製作するための木材・巨大なイーゼルの入手、フレーム製作ワークショップ、組立・展示作業などを、他のいくつかのプロジェクトと並行しながら進める中で感じたのは、参加する人々それぞれのアツイ想いです。

現代アーティストの門脇さんが「アート」を語る姿からは、作品ができあがるまでの人との時間をとても大切にしていることが伝わってきました。アチェの若者メンバーや子どもたちと作った曲「ARIGATO,SAHABAT」は、壁画披露セレモニーでメンバーによって歌われ、セレモニーを盛り上げました。

通訳・現地コーディネーターのハナフィさんは、若者と NGO のこれからのことを真剣に考えるアツイ先生です。何度も門脇さんと打ち合わせを重ね、必要なものを手配したり、若者メンバーをリードしたりして作業に取り組んでいました。同じく通訳と現地コーディネートをしてくれたパンリマさん。時に冗談を交えてみんなを笑わせ、時に何度も交渉を重ね活動に関する様々なことを調整してくれました。ハナフィさんやパンリマさんが話してくれたアチェについての様々な話は、私とアチェの距離を縮めてくれたように思います。

そして、地球対話ラボの渡辺さん。異なる文化をもつ地でのプロジェクトでは、突然のスケジュール変更などのハプニングも多くありましたが、それらを冷静に判断し、プロジェクトを進めていく姿から多くのことを学びました。

未来を描いた宮戸小とアチェの子どもたちと指導した先生の想いに、それを伝えようとする人々の想いが重なったのではないかと思います。たくさんの想いが 2 枚の壁画を通して訪れる人々に伝わってほしい、そう感じたプロジェクトでした。



震災遺構の上から白い毛糸を投げるアチェの若者たち

## コミュニティアート in アチェ

現代アーティスト 門脇篤

7月15日～23日 現地リサーチ  
 12月13日～27日 現地制作  
 12月15日 ランピラ村でのレコーディング  
 12月18日 おしるこカフェ  
 12月24日～26日 発電船アート展示



上から、震災遺構のモニュメント前のインスタレーション、これから日本へ行く若者たちと、アチェではどこでも猫が自由に出入りしている

東日本大震災直後、情報が恐ろしいほどにあふれ出し、自分にはもうこれ以上つけ加えることなど何もないという無力感に襲われた。何かを表現すること、何かをしり、つくったりして、それを「ひと」に発信することを自分のよりどころとしていた私は、その唯一と言ってもいいようなよりどころを失い、情報が津波のようにすべてを襲い、押し流し、洗い合うのを目の当たりにして、自分がこれまでやってきたこともまたこういうことだったのかと気づかされ、もうこの先、何かを伝えようなどと考えるのは決してするまいと心に誓った。あの日、すべての日常が日常でなくなり、すべての価値が価値でなくなったあの日、その気持ちを正確に取り戻すのは、もうすでにかなり難しくなっているけれど、確かに私はそう固く心に決めたのを覚えている。

そんな私に、いかにも気軽に「被災地の映像撮って来て～」とたのんで来た人がいた。「ツイッターとかよくやってるでしょ」みたいな。それが横浜に住む旧知のアーティスト Art Lab Ova である。その大元の依頼主が地球対話ラボだったことを知るはその後のことだが。

結局のところ、私はその映像を撮ることになる。Ova への「手紙」として。そして、「もう何かを伝えようなどと考えるのはやめる」という先の私の誓いは、「誰に向けているのかわからないような『情報』を垂れ流すのは金輪際やめる」ということだったと気づいたのだ。

「コミュニティアート」とは、第二次大戦後のヨーロッパで始まった、アートによる社会問題解決に向けた取り組みのことである。アーティスト＝他者が地域に入ることで、地域の課題を可視化したり、相対化したり、表現したり。すでにその歴史は古く、手垢のついたその言葉をあえて使う必要があるのかと立ち止まることも多い。いや、むしろ「アート」という言葉ですらうだ。

今回、インドネシアのアチェという、コミュニティ文化が豊かに息づく地域で、孤立化やコミュニティの再生が死活問題になっているような国からやって来た「コミュニティアート」や「アート」に、何が出来るのだろうとも思った。しかし一連の企画に参加した若者から「みんなでおしるこを食べたり、毛糸を投げたり、歌を作ったり、こんな楽しい活動なのになぜ『アート』なんて（わかりにくい）言葉を使うのか」という言葉を受け取ることができた。その、おそらくは質問というかたちをとりながらの提案に対する私自身の考えはと言えば、むしろだからこそ使いつづけようと思う、というものはあるのだが。

今回の一連の企画で7月と12月の2回、アチェを訪れたのだが、最初私は自分の役割を、「子ども支援を行うアチェの若者たちが求めていることを手伝うこと」ととらえた。それが何なのかを可視化したり、日本との関わりにおいて相対化したり、いっしょに表現したりしようとアチェの地を踏んだ。しかし私のそうした考えは、震災後、毎日通えるような地元での活動が活動の中心という、あまりに幸せな状況に慣れてしまった自分が考えた机上の空論だったことに気づかされる。ほんの数週間の滞在で何が出来るというのか。そこで私は方針を変えることにした。私自身がやりたいことを提案し、

右：レコーディングをするKSAの若者たち  
 下：「Arigato, Sahabat」ジャケット



それを手伝ってもらい、その中から何かを拾ってもらおうと思った。そしてそれは、震災前にやっていたこと、つまり遠隔地へ出かけて行って、短い滞在中でその地域を「読み込み」ながら、手伝ってくれる善良な人々の善意の上に乗った、なんとなくそれらしい達成感を味わえる共同作業的な何かに過ぎないのかもしれないのだが。

7月の滞在中で手に入れた「東北とアチェは兄弟のようなもの」という言葉を盾に、津波によって沿岸から4キロ内陸にあるブングブランチェ村まで流され、現在は巨大な震災遺構として多くの被災地ツアー客が訪れる発電船「PLTD Apung」での展示とワークショップを立案した。村の人たちにも何をしたいのかを知ってもらうために、仙台の仮設住宅で始め、現在も復興住宅で行っているおしるこを食べる会「おしるこカフェ」を敷地内で行うことにした。白い毛糸をインスタレーション（仮設展示）として敷地内に設置するとともに、これから日本へ旅立つアチェの技術研修生たちに発電船の屋上から投げてもらった。それは東日本大震災＝東北の象徴としての「雪」だ。もちろん、アチェには雪は降らない。同じ経験をしたものどうしが、時間や空間をこえてお互いの気持ちを「わかる」と言う、その象徴としての、ささやかで、不確かで、はかない存在としてのそれだ。

いわば「ドキュメンタリー」としてのラップと音楽づくりは、震災後に始めたものだが、今回のアチェの企画でも、7月の初めての訪問から12月の再訪の間も制作は進行し、最終的には発電船での展示オープニングやアチェ津波博物館での壁画お披露目セレモニーで上演、現在は iTunes など各ストアから配信されている。バンダアチェ郊外のランピラ村を訪れ、みんなで遊んだり、「いっしょに歌をつくろう」と言ったのを覚えていた TPMT の若者ラウダーが、Facebook のメッセージで「生まれて初めて書いたアチェ語の詩」と送ってくれたのがきっかけだ。後に、ふだんはインドネシア語を使うため、若者は満足にアチェ語を操れないということがわかり、なぜ「生まれて初めて書いた」のかを知るのだが。通訳のパンリマさんが「これはアチェ語とインドネシア語がまじったヘンテコな文章です」というその詩は、しかしそれ自身が今現在のアチェ語を表しているのではと考え、「それでもここだけは直した方がいいですよ」というところを修正したり、ランピラ村でアチェ語の達者な若者にも手直ししてもらったりしながら、12月の滞在中に少しずつ育っていった。レコーディングに参加してくれたのはランピラ小学校のこどもたちと、KSAの若者たち。いずれもちゃんとレコーディングの日程を打ち合わせ、練習を重ねて、といったプロセスはなく、ヒマそうにしている若者やこどもに声をかけ、あまった時間で「じゃ、今やってみる？」的なノリでできあがっていった。

タイトルは「Arigato, Sahabat（ありがとう、みんな）」。海をへだてても、知り合って友達になった私たちは、いつもお互いをなんとなく気にかけている。でも「あの日」は違った。会ったこともない人たちのことを私たちはあんなにも心配した。その気持ちを忘れないでーそんな内容で、1番がアチェ語、2番が日本語になっている。ムクマルは初めてラップに挑戦。実際に見事なパフォーマンスを披露してくれた。

曲も録音も完成し、展示も全部整って、1日ゆっくり発電船で過ごす日があった。地元の彫刻家レストゥさんが作った彫刻の前で来場者たちが記念写真を撮るのを、すぐそばのデッキチェアに座ってながめていると、曲づくりに参加してくれたメルとムクマルが、かわりばんこにやって来て、こちらから尋ねたわけでもないのにポツリポツリとそれぞれの震災体験を語ってくれた。両親は無事だったけれど、祖父母は亡くなってしまったというメルは、今でも津波の映像を見ることができないという。一方、母を失ったムクマルはしばらく鬱々としていたが、両親とも失ったことも大勢いる中で、父だけでも助かった自分は幸運だったと考え、津波を乗り越えることができたと言ってくれた。

そんな話を聞きながら、こうして遠く日本から、同じ被災地だからということまで来ているわけだから、私という存在は、彼らに震災の体験を語ることが自分たちの役割だと思わせてしまっているのかもしれない。彼らが日頃それほど感じることもなく過しているかもしれないアチェ＝被災地、自分＝被災者ということに、常に向き合ってしまう存在なのかもしれない。別にスマトラ島沖地震があったとかなかったとか、そんなことは関係なく、アチェにはいろいろなおもしろいところがあり、そこに住む人々にもそれぞれの味わい深い人生があるにも関わらず、12年以上が経過したこの地ですら、やはりいまだにそこには「あの波」が押し寄せつづけているのかもしれない。自分自身もその「波」のひとつであるということ、そして同じく東北に住む自分たちも同じ「波」に流し流され、受け流したり、飲み込まれたりしながら生きているということ。そんなことを、アチェでアートを通して私は思ったのだ。



上から、ランピラ小学校でのレコーディング、ブングブランチェでの「おしるこカフェ」、ブングブランチェ村の村長夫人と、コウゲツスクールのこどもたちと



## 次の対話へ向かって

### チューブをつなぐ

門脇さんに、アチェの若者たちとコミュニティアートをやって、どう感じたか聞いてみました。「ラウダさんがアチェ語で歌詞を書いてきたとか、料理の勉強をしているメルさんが、おしるごとか、自分の興味に引きつけて、得意分野で関わってきてくれた。その中で、言語とか社会的背景の違いが、バリアというよりは、逆にそれによって、よりよくお互いの社会が見えるようになった。」「たとえば、おしるごやりました！とか、事業として形にすること、その合間の、ひまそうだから一緒に歌をうたってみたとか、そういうあそびみたいな部分がある。本来、僕がやっているのは後者。なんとなく、いっしょに何かやったりした中で、突然、何かうまれてくる。」

それを聞いて、地球対話ラボが考える「対話」も同じようなことが言えると思いました。あちらとこちらで向かい合って、初めてそこで何かが起こっちゃう、というような。僕たちが仕掛けているのは、人と人をつなぐチューブのようなもの。これからも地球上のあちこちにチューブをつないでいきたいと思っています。

(森 透/地球対話ラボ 理事)

### 新しい動きのあった1年でした

宮野森小の宮崎さん・小鹿さんの報告の中に、交流をする前と後で、子どもたちの一部にインドネシアに対して下に見るようなところがあつたけれど、それがなくなった、とか、特別支援学級の子に対する見方が変わった、ということがありました。それは小さい変化かもしれないけれど、大事なことだと思います。

アチェでは、ハナフィさんが、これからも対話を続けたい、もっと広げたいと想いを語り、KSAとTPMTのメンバーたちは、子どもとのワークショップや、対話の設定・進行を自分たちでできるようになって、スタディツアーの企画・運営にも挑戦しました。

門脇さんがアチェでコミュニティアートをやり、子どもからのメッセージは壁画という形でアチェの被災地ツーリズムに加わりました。2016年はいろいろな動きや進展がありました。

アチェで試した360度の動画や、VR・ARなど、通信・映像の技術は、すごいスピードで変化しています。今後は新しい技術を活用した「地球対話」も考えていきたいと思っています。

(渡辺裕一/地球対話ラボ 事務局長)



## 地球対話ラボ活動概要

### 地球対話ラボ

地球対話ラボの活動は、2002年の「アフガン対話プロジェクト」(任意団体)から始まりました。この年、衛星電話とテレビ電話を使って、戦争で荒廃したアフガニスタンの首都カブールと日本の、高校生同士の対話を実施。その後もマスメディアが伝えない場所へ、発信する機会のない人々へと、対話を模索し、2003年にイラク開戦直前のフセイン政権下で高校生と、2005年には再びアフガニスタンの高校生との対話を実現しました。さらに、海外の団体や学校、そこで活動する人、日本の学校や様々な分野の団体・協力者と出会い、対話につなげていきました。当時はプロジェクト毎に有志が集まり、「サポートチーム」として活動していました。

その間に、インターネットや通信機器の進化、SNSや映像配信サービスの登場など、「対話」をめぐる環境は大きく変わりました。そこで2010年、新しい「対話」のあり方を模索しながら、地球上のあちこちへ対話による出会いとつながりを広げて行こうと、地球対話ラボを設立。2010年5月、NPO法人の認証を受けました。

「地球対話」は、インターネットテレビ電話などを使って、地球上で遠く離れた国や地域など、日常生活では出会うことが難しい人びとの間をつないで行く、同時・双方向・対面のコミュニケーション。そこには、お互いの顔を見て/見られて、声や表情が作用し合う場が生まれます。相手のことばに驚いたり、一緒に笑ったり、その実感や経験から、自分が変わり、相手との関係が変わり、やがて世界が変わる、そんな交流を目指しています。



アフガニスタン・カブールの高校。教室が足りず、屋外にテントを張って授業を行っていた。(2005年)



ブータンの小学校 (2013年)



アチェでiPad touchを使った映像ワークショップ (2013年)



ポリビアの日本語学校での対話 (2010年)

- 2002年 アフガン高校生対話プロジェクト
- 2003年 イラク高校生対話プロジェクト
- 2005年 アフガン高校生対話プロジェクト
- 2005～2006年 モルディブと富山の大学生環境対話プロジェクト
- 2007年 ラオス小学生対話プロジェクト
- 2008年～2010年 南米日本語学校との対話プロジェクト
- 2009年 ボリビアと沖縄粟国島の小中学生対話プロジェクト
- 2010年 バングラデシュとの働く女性同士の対話
- 2010年 子どもが国会議員に授業：インターネット生中継
- 2010年 ラオスの親子と動画・生中継対話をしよう！
- 2010年 バングラデシュとの大学生対話
- 2011～12年「大田区の子どもが世界に発信！大田パワー」  
(ネット生中継、映像配信、韓国との対話)
- 2012年～13年「子どもインターネット国際交流ステーション」  
(写真配信、台湾との対話、ブータンとの対話)
- 2012～13年 宮戸小学校(宮城県東松島市)とゲドゥ(ブータン南部)の子ども対話
- 2013年～ 東松島市とインドネシア・アチェの子ども国際交流 (継続中)
- 2013年 インドネシア・ジョグジャカルタ近郊の小学校と大田区のカフェで子ども対話
- 2016年 宮戸小学校とアチェの子ども壁画をアチェ津波博物館に展示  
※地球対話ラボのホームページで各プロジェクトの記録や動画をご覧ください。

### <2016年度のメディア掲載・放映>

- 2016/12/23 河北新報「宮野森小・インドネシアとテレビ電話対話」
- 2016/12/25 NHK総合ニュース「アチェ津波博物館・インドネシアと宮城の子どもの絵を展示」
- 2016/12/26 じゃかるた新聞「復興願う2枚の絵 きょうアチェ津波から12年 教訓を未来へ 津波博物館」(1面トップ記事)
- 2017/1/13 NHK・BS1国際報道2017特集 WORLD LOUNGE 「アチェと東北・津波被災地の絆」
- 2017/2/14 河北新報「津波被災地 国境越え草の根レベルで交流」



活動報告会 (2017年3月5日)